

子どもは優れた社会科授業から何を学んだか

—社会科研究校の卒業生に対する調査から—

影山清四郎*

What had Children learned from good Social Studies Teaching?

Seishiro KAGEYAMA

はじめに

全国の学校において毎日何千・何万の授業が展開されている。その中には、学校全体で長期間にわたる研究の一環として展開されているものもあれば、指導要領や教科書に依拠し制度化された知識を伝達するものもある。

周知のとおり、こうした授業を対象としてさまざまな角度から授業研究が展開されている。その研究は大きく二つの傾向に分けることができよう。その一つは、教師の側から授業を研究する立場である。今日の多くの授業研究は一時間なり一単元をいかに展開すれば目標を達成できるかという点に置かれている。当該教科の内容・方法についての研究から、教材・指導過程の研究、教師の教科・教材観・授業観などについての研究なども短い単位における教師とその働きかけに力点がおかれている。

それに対してもう一つの授業研究は、第三者の目で授業に働いている諸要因を解明せんとするものである。子どもの認知過程や教師の発問と子どもの思考との関係、子ども同士の関係などなどに焦点が当てられ、教師の気づかない授業の構造を明らかにしようとしている。いわば教室の後ろから授業を分析するものである。

しかし、いずれも短い一単位の授業を対象とし、教師ないしは授業研究者の目で分析している。そこには、被教育者である子どもは傍証としてしか位置づけられていないのである。つまり、短い一単位の授業が時間の経過の中で被教育者にとっていかなる意味をもっているか考察されることはきわめてまれである。

教育の論理は未来性と間接性(上田 薫)にあるとすれば、こうした授業研究はもっとも重要な視点を欠落させているといわざるえない。たしかに、自己形成には様々な因子が働いている。家庭や地域環境も学校も友人関係も因子となっている。しかもその因子自体も日々変化をとげている。したがって、ある授業が自己にとっていかなる意味をもっていたかを明らかにすることは不可能に近いであろう。実際に、多くの自伝や教育体験に語ら

* 社会科教育教室

れるのは、ある教科の授業ではなく、教師や友人との出会いである。何よりも自らの教育体験を語る時、体験は語るその時の立場に彩られており、語ることによって語る本人自身に変化していくことは想像に難くない。

そのため、こうした時間をおいた、被教育者の視点からの授業についての振り返りは体験談として成立しても、客観的な授業研究として成立してこなかった。いままでの授業研究で、以上のような視点を持ちこんだ研究はきわめて少ないが、以下の研究は先駆的で、かつ興味深いものである。

加藤章は、「社会科体験の意味するもの」①において、1977年に大学生261名に対して各自の小・中学校における社会科体験を自由に記述させ、それを分析している。分析の視点は、小・中学校の社会科で特に印象に残ったもの、社会科の「面白さ」をめぐる問題、郷土学習をめぐる問題の3点である。対象となった社会科授業は本稿で意図している社会科研究校のそれではない。1960年代のごく一般的社会科授業である。またそれだけに、定型化された社会科授業の一端を知る意味で興味深い。

村井淳志・守友 崇は「安井俊夫にみる主権者を育てる社会科」②において、1973年～74年に安井俊夫に担任され、歴史・公民の授業を受けた松戸第一中学校の元生徒10人を対象として、聞き取り調査を実施している。その後も村井は、本多公栄の「僕らの太平洋戦争」を体験した生徒を対象として、20年の時間をおいて聞き取り調査を試みている。③これらの調査は、対象とされた被教育者は少ないが、中学校社会科実践として特筆すべき実践を体験した生徒の声を時間をおいて聞いている点で、他に例をみないものである。

優れた実践を見たとき、私たちはこのような授業を受けた者はその後どのような生き方をするのか思いめぐらすことがある。この研究はそうした関心に応えてくれるものである。

1 本稿の意図

前述した研究は、いずれも社会科授業で獲得した知識・理解を問うているものではない。自己の受けた社会科授業をトータルに評価させ、その自己にとっての意味を問うていることに特徴がある。時間の経過をおいての授業研究はしばしば知識の定着度に焦点化されがちである。しかし、私たちの学びはそれだけではない。教育の未来性と間接性の観点からすれば、だれと、どのように何を学んだか、それがいまいかに生きているか（生かそうとしいるか）が問われてしかるべきであろう。いまはやりの「新学力観」流に言えば、知識理解ばかりではなく、関心・意欲、態度、能力と不可分の関係にあることを見落とすことはできない。そうした意味で、前述の研究に注目したのであるが、研究熱心の学校は個人ではなく教師集団によって、長い年月をかけて研究されてきている。安井実践や本多実践は、それを許容する教師集団を認め得るが、あくまで安井や本多の実践である。加藤氏が対象とした授業は、「一般的」という点では「客観的」ではあるが、安井や本多の実践のもつ迫力にかけるといわざるえない。

本稿では、可能な限り被教育者の立場からしかも時間の経過をおいて、社会科授業で獲得した知識ではなく、能力・態度等の被教育者の「学び」を総合的に問おうとしている点

では、上記加藤・村井等の研究と同じ問題意識にたっている。

しかし、本稿では日常的に繰り広げられている社会科授業一般ではなく、長い間学校ぐるみで行われてきた社会科研究から生み出された社会科授業を対象としている。その点では加藤の研究より村井のそれに近い。村井は、その授業の体験者を主として聞き取りという方法によって、その授業を被教育者がどのように受け止め、いま評価しているかを問うている。それだけに個人により深く・鋭くせまるものである。しかし、私たちは多くの授業を受け—自己にとって意味あるものも、そうでないものも—そこにおける「学び」を自覚しないで生きていることが多い。そこへ、かつてのある授業について問われることは、無自覚な意味づけを変化させることになるのではないだろうか。問われたその時に、その意味づけを変化させてしまうことを恐れる。

そこで、本稿では間接的にその授業の意味を探ることにした。いわば、加藤と村井の方法の中間を採用していることになる。つまり、当該授業（「優れた授業」）の経験者と、同じ時期に他の学校・学級で学んだ者を対象として、同一の質問に答えてもらうことによって、その相違を明らかにし、当該授業の特質を浮き彫りにしようと試みた。

2 優れた授業とは

先に、学校ぐるみでの社会科研究から生み出された授業と問題としている授業を規定したが、「優れた授業」とはそれだけであろうか。安井・本多も「歴史教育者協議会」の会員であると同じように、ここで取り上げる実践者も「社会科の初志をつらぬく会」の会員である。ある研究会に所属しているかどうかを問題にしているのではない。「優れた実践」には実践者の一貫した教育観・子ども観・授業観・教材観等があるという教師の立脚点を問題にしているのである。本稿でとりあげる実践者の共通する立脚点をキー・ワードとしてあげれば、「問題解決学習」「子ども中心」「追究としての学習」ということになる。多くの教師は自覚しようとしまいと、自己の立脚点をもっている。その意味ではここで取り上げる実践者のそれも特別なものではない。多くの一般的授業と区別するものはなんだろうか。それが本稿の課題でもあるが、ここでは、長期にわたって、学校ぐるみでの社会科研究は、①自己の実践を第三者の批判の目にさらすことであり、②その批判によって自己の実践を自ら対象化し、再構築の連続に置き ③しかも、長期にわたって実践のすみずみまで自己の立脚点をしみわたらせることを余儀なくさせられる。いわば、分析にたえうる授業ということになる。第三者が当該授業について分け入って考えてみたいと思うのは、その授業が提案性に富んでいるからである。後述するように、ここで取り上げられる授業の大半は第三者による分析が加えられている。

本稿で取り上げる授業は以下の通りである。

ア 「日本の工業」（5年，1973年，横浜国立大学教育学部附属鎌倉小，峰 勉教諭）

④

イ 「学校までの道」（1年，1975年，同上）⑤

ウ 「おとしより」（3年，1979年，同上小，伊澤直志教諭）

エ 「日本の工業」（5年，1971年，神奈川県足柄上郡大井小，松本健嗣教諭）⑥

オ 「伝統産業」(5年, 1983年, 横浜市立東小, 嶋本享介教諭) ⑦

カ 「政治の学習」(6年, 1984年, 同上小, 関 治子教諭)

上記のイは「初志の会」第19回全国大会(1976年)に、エは、第15回大会(1972年)に、オは27回(1984年)大会に提案されたものである。エの授業については山田勉が「抵抗としての教材」(黎明書房, 1974年)で分析を詳細に行っている。オとカの実践の背景については、市川博・東小学校編「実感的なわかり方を目ざす社会科指導」(明治図書, 1983年)にまとめられている。オの授業は筆者も度々参加させてもらったものであるが、その概要は伊澤直志「子どものまなざしやねがいへの着目を」(『教育科学 社会科教育』, 明治図書, 1980年10月)に掲載されている。カについては、市川博・影山清四郎編「実践教職課程講座, No22, 社会科」(日本教育図書センター, 1988年)に実践者が実践の紹介とその分析を行っている。

それぞれの授業の印象的なプロヒールをあげると以下の通りである。

アでは、日本の工業の学習にあたって、公害等の問題から入るか、日本の工業の特色から入るか10時間以上にわたって論議されている。イでは、通学路について信号を渡らず登校する友達の通学路について激しい討論が繰り広げられている。ウでは、たった一日の「老人の日」でよいのかと、地域のおとしよりの生きてきた歩みを聞き取り、おとしよりへの想いを発表しあっている。エは、昭和初期の不況を乗り越えた地域の繊維工場の経営者がもっていた経営意志・意欲を解明するものであり、オは自動車会社をやめて伝統工業の後継者となった方の生き方に迫ろうとしている。カは、身障者にやさしい町かどうか、実際に車椅子にのってたしかめ、身障者の立場から町の見直しを行ったものである。

いずれも、ある定型化された知識を教えるものではない。むしろ、正解のない問題を追究している点に特色がある。信号を守るということは、そこまでの道に危険がある場合がある。その危険を回避するためにルールを守るかどうか、私たちは選択をしている。自動車工場をやめて、伝統工業の後継者になるということは、子どもならずとも私たちも考えこむ問題である。取り上げた授業にはそうした今日の問題性を含んでいる。その問題性が上記の授業をひっばえていると言うことができよう。

3 調査の方法

上記の授業を受けたもの全員と、それぞれの授業体験者が進学する中学校名簿に基づいて同一地域・同一学年の者に調査用紙を郵送し、郵送で回収した。前者を研究校とよび、後者を一般校とよぶことにする。調査の時期は1990年2月である。調査総数は、1020名で回収は244名で、回収率は全体で、23.9%、研究校のみでは25%であった。(回答者数は研究校53名、一般校192名) ⑧

年齢は、調査時点で上は30歳、下は19歳である。

以下、質問項目をまず紹介し、結果を表であらわし、その分析を加えることにする。紙幅の都合で一部の調査項目は割愛してある。

4 小学校の時の好きな教科と嫌いな教科

まず、「小学校の時、好きだった教科は何ですか。下の教科の中からいくつでもよいですから選んでください。また、その中で最も好きだった教科は何ですか。」聞いてみた。選択肢は各教科と道徳である。

次に、同じように嫌いだった教科について聞いてみた。

表① 好きな教科（数字は人数，カッコ内数字は％）

教科	校種	好き(%)	最も好き(%)	好き全体(%)
国語	研究校	16(30.8)	2(3.8)	18(34.6)
	一般校	56(29.2)	23(12.0)	79(41.1)
社会	研究校	15(28.8)	13(25.0)	28(53.8)
	一般校	58(30.2)	13(6.8)	71(37.0)
算数	研究校	12(23.1)	5(9.6)	17(32.7)
	一般校	55(28.6)	25(13.0)	80(41.7)
理科	研究校	16(30.8)	1(1.9)	17(32.7)
	一般校	56(29.2)	13(6.8)	69(35.9)
音楽	研究校	19(36.5)	4(7.7)	23(44.2)
	一般校	64(33.3)	17(8.9)	81(42.2)
図工	研究校	19(36.5)	10(19.2)	29(55.8)
	一般校	48(25.0)	21(10.9)	69(35.9)
体育	研究校	18(34.6)	15(28.8)	33(63.5)
	一般校	56(29.2)	37(19.3)	93(48.4)
家庭科	研究校	8(15.4)	1(1.9)	9(17.3)
	一般校	25(13.0)	4(2.1)	29(15.0)
道徳	研究校	4(7.7)	0(0.0)	4(7.4)
	一般校	10(5.2)	0(0.0)	10(5.2)
特に無し	研究校	3(5.8)	1(1.9)	4(5.2)
	一般校	9(4.7)	1(0.5)	10(5.2)
不明	研究校	2(3.8)	0(0.0)	2(3.8)

表② 嫌いな教科（数字は人数，カッコ内は％）

教科	校種	きらい(%)	特に嫌い(%)	嫌い全体(%)
国語	研究校	2(3.8)	7(13.5)	9(17.3)
	一般校	7(3.6)	19(9.9)	26(13.5)
社会	研究校	3(5.7)	2(3.8)	5(9.4)
	一般校	10(5.2)	12(6.3)	22(11.5)
算数	研究校	2(3.8)	13(25.0)	15(28.8)

	一般校	10(5.2)	28(14.6)	38(19.8)
理科	研究校	5(9.6)	2(3.8)	7(13.5)
	一般校	15(7.8)	6(3.1)	21(7.7)
音楽	研究校	3(5.8)	1(1.9)	4(7.7)
	一般校	10(5.2)	20(10.4)	30(15.6)
図工	研究校	3(5.8)	2(3.8)	5(9.6)
	一般校	18(9.4)	18(9.4)	36(18.8)
体育	研究校	1(1.9)	2(3.8)	3(5.8)
	一般校	9(4.7)	28(14.6)	37(19.3)
家庭科	研究校	2(3.8)	4(7.7)	6(11.9)
	一般校	11(5.7)	12(6.3)	23(12.0)
道徳	研究校	0(0.0)	1(1.9)	1(1.9)
	一般校	15(7.8)	4(2.1)	19(9.9)
特に無し	研究校	2(3.8)	11(21.2)	13(25.0)
	一般校	5(2.6)	25(13.0)	30(15.6)
不明	研究校	0(0.0)	2(3.8)	2(3.8)
	一般校	0(0.0)	2(1.0)	2(1.0)

表①で特徴的なことは、研究校で社会科好きと回答した者が、53.8%を占め、一般校の37%を大きく引き離していることである。とりわけ、社会科が特に好きと答えた者は25%を占め、一般校の6.8%と大きく異なっていることである。その他、目につくことは図工・体育において研究校の方が一般校よりも好きと答えた者が多いということである。このことは、後述するように研究校の授業は子どもの主体的な学習参加を重視してきたことの表れと考えられる。

表②は嫌いな教科を聞いたものであるが、国語・算数では研究校の方が嫌いと答える者が多いことである。特に算数が特に嫌いと答える者が25%を占め、社会科と逆転している。その理由はどこにあるのか、上記の教科を中心に理由を調べてみよう。

5 好きな教科とその理由

質問は、その「教科が好きだった理由は何ですか。下の中からいくつでもよいですから選んでください」とした。

ア 先生が好きだったから、イ 成績が良かったから、ウ 先生の話がおもしろかったから、エ 手や体を動かすから、オ テレビなどをよく見せてくれたから カ 実験でたしかめあったから キ 自分の考えを発表できたから ク 合唱や合奏の楽しさがあったから、ケ みんなで調べたり、考え合ったから、コ 興味があったから、サ 一人ひとりの考えを大切にしてくれたから、シ わからない ス その他

ここでは、表①で好きだったと答えた国語・社会・図工についてのみ紹介する。

国語好き (総数 97 名, うち研究校 18 名・一般校 79 名)
 社会科好き (総数 99 名, うち研究校 28 名・一般校 71 名)
 図工好き (総数 98 名, うち研究校 29 名・一般校 69 名) の理由。

表③ 好きな教科の理由 (単位は%)

教科 理由	国語		社会科		図工	
	研究校	一般校	研究校	一般校	研究校	一般校
ア	44.4	10.1	53.6	26.8	44.8	23.2
イ	11.1	51.9	17.9	42.3	41.4	42.0
ウ	27.8	22.8	35.7	26.8	31.0	18.8
エ	38.9	26.6	21.4	35.2	51.7	56.5
オ	11.1	5.1	3.6	7.0	0.0	7.2
カ	27.8	12.7	14.3	11.3	24.1	13.0
キ	33.3	15.2	14.3	11.3	44.8	31.9
ク	38.9	39.2	17.9	18.3	24.1	24.6
ケ	88.9	20.3	75.0	38.0	34.5	20.3
コ	88.9	43.0	50.5	69.0	69.0	73.9
サ	77.8	11.4	67.9	21.1	44.8	18.8
シ	0.0	0.0	0.0	2.8	0.0	1.4
ス	0.0	1.3	0.0	2.8	0.0	7.2

6 嫌いな教科の理由

上記と同じように、嫌いだった教科の理由を下記の中から選択してもらった (複数回答) ア 成績が悪かったから, イ 先生がこわかったから, ウ 先生の話がむずかしかったから, エ 手や体を動かすから, オ 実験があったから, カ 自分の意見を発表しなければいけなかったから, キ 正解が何かよくわからなかったから, ク 興味をもてなかったから, ケ わからない, コ その他

ここでは、国語・社会・算数について紹介する。

国語嫌い (総数 35 名, うち研究校 9 名, 一般校 26 名)
 社会科嫌い (総数 27 名, うち研究校 5 名, 一般校 22 名)
 算数嫌い (総数 53 名, うち研究校 15 名, 一般校 38 名)

表④ 嫌いな教科の理由 (単位%)

教科 理由	国語		社会科		算数	
	研究校	一般校	研究校	一般校	研究校	一般校
ア	44.4	42.3	50.0	50.0	66.7	52.0
イ	0.0	3.8	0.0	4.5	6.7	0.0
ウ	0.0	15.4	0.0	18.2	13.3	10.0

エ	11.1	0.0	0.0	0.0	6.7	2.6
オ	11.1	0.0	0.0	0.0	0.0	5.3
カ	22.2	7.7	50.0	9.1	6.7	2.6
キ	44.4	53.8	25.0	63.6	60.0	26.3
ク	55.6	50.0	75.0	59.1	46.7	55.3
ケ	0.0	7.7	0.0	9.1	0.0	10.5
コ	22.2	7.7	0.0	9.1	0.0	13.2

表③をみてもわかるように、取り上げた教科において研究校と一般校の大きな相違がみられる。国語・社会で、好きな理由として研究校ではケの「みんなで調べたり・考え合ったりする」、サの「一人ひとりの考えを大切にしてくれた」、アの「先生が好きだったから」を指摘する者が多い。逆に、一般校ではその理由が著しく低いのが特徴的である。研究校で国語と社会に差が顕著なのは、キの「自分の考えが発表できた」という点である。社会が78.6%であるのに対して、国語は33.8%でしかない。この理由はここではとらえられないが、社会科を中心に研究してきたことの表れと推測してもよいのではないだろうか。以上の点に、研究校の授業の特質をうかがい知ることができよう。他方、一般校では、国語も社会もイの「成績が良かったから」とクの「興味があったから」を指摘する者が多い。いずれも教師との関係というより本人自身に理由を見いだしていることに特徴がある。また、社会科でエの「手や体を動かす」が35.2%と多いのが目につく。

図工の場合は、国語や社会ほど数値は高くないが、キ（自分の考え）とサ（一人ひとり）ア（先生が好き）が一般校より高く、逆に一般校ではイ（成績）とコ（興味）が高いのは国語・社会と同質のものをもっていいよう。

表④のように、嫌いな教科の理由は、回答者数が少なく一般化できないが、社会科で研究校の卒業生がカの「自分の意見を発表しなければならなかった」をあげていることが目につく。上記の研究校における授業の特質の裏返しと考えられる。算数でもキの「正解がなんであるかわからなかった」が一般校よりはるかに高い数値を示しているのは、「考え合う授業」という名のもとに、「こね回しすぎた」ことへの批判ではないだろうか。

次に、教科についてこのような好き・嫌いをもっていた子どもが、何年もたってから社会科授業の何を思い出すのであろうか。国語・社会・算数が好きだと答えた者についてのみ調べてみよう。

7 思い出す社会科授業

質問は次の通りである。「あなたが今でも思い出として残っている社会科の授業はありますか。下の中から選んで下さい。いくつでも結構です。また、その中で最も強く思い出す授業は何ですか」

ア 学校の通学路について、クラスで議論したこと、イ ポストを作ったりして、郵便について学んだこと、ウ 乗り物について学んだこと、エ パン工場（又は、キャラメル

工場)を見学して学んだこと, オ ごみ収集やごみ焼却場について学んだこと, カ 学区の商店街を見学して, 絵地図などにあらわした学習, キ 地域の開発に貢献した人について学んだこと, ク 県の地形・産業などについて学んだこと, ケ 県庁所在地や我が国の山脈・平野・河川について学んだこと, コ 雪国の暮らしや高地のくらしなど, 特色のある地域について学んだこと, サ 地域にある工場に即して, 経営者の工夫や苦勞を学んだこと, シ 戦争のあったころの暮らしについて, 地域のお年寄りから教えてもらった授業, ス 農業について, 農家を見学して学習したこと, セ 和紙を実際に作って, 和紙作りをしている人について学んだこと, ソ 我が国の工業の授業で, 公害について考え合ったこと, タ 政治の勉強で, 身障者にふさわしい街になっているか学んだこと, チ 大仏作りについて, 考え合ったこと, ツ 開国について, 為政者の判断の是非を考え合ったこと。

なお, 国語好き・社会科好きの人数は上記と同じで 国語 97 名, 社会 99 名である。算数好きは, 総数 97 名, うち研究校 17 名, 一般校 80 名である。

表⑤ 思い出す社会科授業 (単位は%)

教科 授業名	国語		社会		算数	
	研究校	一般校	研究校	一般校	研究校	一般校
ア	5.6	7.6	7.1	8.5	11.8	11.3
イ	33.3	21.5	32.1	12.7	47.1	8.8
ウ	11.1	11.4	7.1	16.9	5.9	13.8
エ	22.2	39.2	17.9	42.3	52.9	30.0
オ	33.3	19.0	28.6	15.5	47.1	22.5
カ	44.4	29.2	32.1	38.0	58.8	32.5
キ	5.6	6.3	14.3	12.7	23.5	6.3
ク	27.8	19.0	21.4	25.4	23.5	26.3
ケ	5.6	32.9	7.1	40.8	5.9	33.8
コ	27.8	20.3	21.4	26.8	17.6	13.8
サ	5.6	7.6	10.7	12.7	5.9	7.5
シ	27.8	2.5	32.1	5.6	35.3	6.3
ス	22.2	12.7	28.6	11.3	35.3	16.3
セ	27.8	0.0	21.4	1.4	23.5	1.3
ソ	38.9	34.2	46.4	25.4	58.8	36.3
タ	10.5	2.8	14.3	4.2	5.9	1.3
チ	2.8	1.2	3.6	7.0	0.0	1.3
ツ	0.0	2.0	0.0	8.5	0.0	1.3

何年もたつて振り返ったとき, 思い出す社会科授業は, 研究校と一般校との間でも, また本人の好きだった教科によっても相違があることがわかる。

まず, 社会科好きから考察してみよう。一般校と比較して研究校で思い出される授業は,

イの「郵便の学習」(32.1%)、オの「ごみ学習」(28.6%)、シの「戦争の学習」(32.1%)、セの「和紙作り」(21.4%)、スの「農業学習」(28.6%)、ソの「公害についての学習」(46.1%)、タの「政治の学習」(14.3%)が目につく。オとソを除けば、いずれも一般校の2倍以上の数値を示している。

逆に、一般校の方が研究校より高い数値を示す学習は、ア「通学路」(8.5%)、ウの「乗り物の学習」(16.9%)、エの「パン工場」(42.3%)、カの「商店街」(38.0%)、ケの「県庁所在地」(40.8%)、クの「県の地形」(25.4%)、コ「各地の暮らし」(26.8%)、サ「工業学習」(12.7%)、チ「大仏づくり」(7.0%)、ツ「開国」(8.5%)である。ウ・エ・ケは、研究校の2倍以上である。研究校と一般校で共に高いのは、カの「商店街」であらう。

研究校の卒業生は、郵便・ごみ・戦争・公害などのように、子どもの視野に入りやすかつそこに深く考えさせる内容を含んだ授業を思い出として残している。逆に、一般校では、乗り物、パン作り、商店街、県庁所在地の学習のように、活動的ないしは覚える学習が思い出として残されている。研究校でも、ごっこ・見学等の活動的学習が展開されてきたのであるから、両者の差は「考える」学習と「覚える」学習の差であるといってもよいだろう。

次に他の教科が好きと回答した者と比較してみよう。上記のように、一般校と比較して研究校の方が2倍以上の高い数値を示している授業は、国語好きではシ・セ・タである。2倍まではいかないが、1.5倍以上の差があるのは、イ・オ・カ・ク・スである。数学好きでは、イ・オ・キ・シ・ス・セ・タの6つの授業が2倍以上の差をもっている。社会科好きの者もオは2倍には至らないが、高い数値であった。三教科に共通するものをあげると、イ・オ・シ・ス・セ・ソ・タの5つの授業である。研究校においては、思い出す授業に教科の好みを越えて共通性があるということが出来る。前述したよに、活動的でありかつ考え合う授業が思い出されている。しかし、国語好きの者はクの「県の地形」が一般校に比して高いが、社会好き・数学好きではわずかではあるが低い。エの「パン工場」については、国語好き・社会好きにおいて研究校の方が一般校より低い、算数好きでは非常に高い数値を示している。そこに、教科と子どものかかわりの相違を見いだすことが出来る。

逆に、一般校で思い出として残っている授業で、高い数値を示しているものは、国語好きではウ・エ・ケ・サである。算数好きでは、ウ・ケ・ク・サである。ウ・ケについては三教科とも同じであるが、上述したようにエについては算数好きで逆転している。

研究校で社会科好きと回答した者以外の「ふりかえり」をとらえようと意図して、他教科についても調べてきた。そこには、教科を越えた共通性があることを確認できる反面、自己と教科のかかわりによって、若干の差を見いだすことが出来る。当然のことながら、社会科研究校だからといって、全ての子どもが同じように授業にかかわるわけではない。それが、ある教科が好き・嫌いとして表現される。それが、思い出す授業の差になってくると考えられる。エやクについての回答は、それを物語っている。さらに、こうした授業を通して、なにを学んだのか次に調べてみよう。

8 社会科授業で学んだこと

「(上記の) 社会授業であなたが学んだことをあげるとすると何ですか。下からいくつでもよいですから、ふさわしい言葉をえらんでください」と聞いてみた。

選択肢は以下の通りである。

ア いろいろ角度を変えて考えてみることに、イ 基礎的な知識をきちんと覚えることに、ウ 友達の考えに学ぶことに、エ 実際の事実にそくして、調べることの大切さに、オ 表面に見える現象とその奥に隠されたものとの相違に、カ 筋道をたてて考えていくことの重要性に、キ 昔はどうだったかと、時間の経過の中で考えることに、ク 自分の意見をはっきりと述べることの重要性に、ケ 実際に働いている人々など当事者の立場で考えることの必要性に、コ 世の中の人や物・組織・制度は密接に関係しあっていることに、サ 私たちの生活は昔の人々の努力によって改善されてきたことに、シ 人々の願いを生かした政治の重要性に、ス 社会的に弱い立場にある人々を大切にすることに、セ、農業でも工業でも、経営する人々の知恵と苦勞があることに、ソ、特になし、タ その他

この設問については、社会科好きと回答した者(99名)と国語好き(97名)についてのみ表でまとめてみることにする。

表⑥ 社会科授業で学んだこと(単位%)

好きな教科 学んだこと	社会科		国語	
	研究校	一般校	研究校	一般校
ア	78.6	43.7	77.8	25.3
イ	14.3	22.5	11.1	21.5
ウ	71.4	21.1	66.7	13.9
エ	50.0	57.7	44.4	53.2
オ	42.9	28.2	55.6	17.7
カ	57.1	32.4	44.4	16.5
キ	25.0	43.7	33.3	35.4
ク	78.6	33.8	66.7	24.1
ケ	57.1	25.4	61.1	27.8
コ	14.3	28.2	16.7	15.2
サ	25.0	19.7	27.8	12.7
シ	7.1	14.1	5.6	5.1
ス	14.3	22.5	33.3	12.7
セ	17.9	16.9	11.1	13.9
ソ	0.0	1.4	0.0	6.3

表⑥を見て気づくことは、50%を越える選択が圧倒的に多いのは研究校である。社会科好きも国語好きも50%を越えて選択しているものは、ア(角度を変えて)・ウ(友達の

考え)・ク(自分の意見)・ケ(当事者の立場)である。とりわけ、ウ・ク・ケについては一般校の2倍以上である。オ(現象の奥)やカ(筋道をたて)も、50%を越えないものもあるが、一般校の2倍以上(研究校のオを除く)を示している。このことは、研究校の授業がクラスでの話し合いを中心に展開されていたことと、一人ひとりの子どもが自分の問題をもって追究していたこと、総じて問題解決学習が展開されていたことを示している。したがって、研究校では、イ(基礎的知識)、キ(昔との比較)やコ(組織・制度)などの知識をとまなう学習が背景にしりぞいていく。いずれも、一般校のほうが高い数値を示している。

国語好きと比較すれば、全体に、社会科好きと回答した研究校の卒業生に比して、数値が低く、コヤス(社会的弱者へのかかわり)のように差が見られる。話し合い活動に乗れなかった裏返しであろうか。

9 社会科研究校の授業の影響

いままで、研究校と一括して一般校との比較において論じてきたが、ここでは冒頭にあげた授業を受けた者について、それぞれの授業に即してみることにする。それぞれの授業を体験した者は、社会科好きだった者は何人いたのか、またそのうち特に社会好きは何人か、その授業を思い出として残している者は何人か、他の思い出す授業は何か、教師の授業の特徴は、またそこで学んだことはなにかについて調べることにする。

なお、教師の授業の特徴については今までの表にはなかったが、新たに、当該授業を担当した教師の指導の特徴も調べてみた。それは下記を選択肢から選択してもらったものである。

ア 基礎的な知識をしっかりと教えてくれた、イ 調べたり、考える力を育ててくれた、ウ 先生が自分の考えをよく話してくれた、エ 先生が中心になって授業をひっぱっていった、オ クラスのみんなで考え合う授業であった、カ 社会生活に必要なきまりをしっかりと教えてくれた、キ 一人ひとりの子どもの考えを尊重していた、ク 教室の中で、座ってする授業が多かった、コ 実験や見学などの活動的な学習が多かった、サ わからない 以下の表では、前述した授業(当該授業)を実践者の名前で、前述の順番にしたがって記してある。

表⑦ 当該授業の体験者による評価(数字は実数)

実践者	峰①	峰②	伊澤	松本	嶋本	関
回答者数 (男・女)	14 (10・4)	9 (3・6)	14 (6・8)	5 (1・4)	4 (2・2)	7 (1・6)
社会好き(特に好き)	7(2)	4(1)	7(2)	3(2)	2(2)	5(4)
百分率	50	44.4	50	60	50	71.4
社会嫌い	1	1	3	0	0	0
思い出す当該授業	8(5)	2	9(3)	1(1)	4(2)	5(4)
その他社会科授業	ク 6	ア 5	エ 11	ス 2	オ 3	セ 5

	ス 3	ス 7	ソ 8	ク 1	ス 2	ソ 3
授業の特徴	イ 11	イ 5	イ 13	イ 4	イ 2	イ 6
	オ 12	オ 7	オ 14	オ 4	オ 2	オ 7
	キ 9	キ 5	キ 12	キ 4	キ 2	キ 4
	ク 7	ク 8	ク 8	ア 2	エ 2	コ 4
学び	ア 9	ア 5	ア 11	ク 2	ア 2	ア 5
	エ 6	エ 4	エ 8	エ 2	ウ 2	ウ 5
	ウ 6	ケ 5	ウ 9	ウ 2	オ 3	ク 6
	カ 9	セ 4	カ 11	キ 3	ク 3	サ 5
	ク 8	コ 2	ケ 9	ケ 2	サ 2	ケ 4

ここから、いくつかの特色を読み取ることができる。

第一に興味深いのは、こうした授業—研究校における研究的授業—の体験者の中にも、社会科嫌いの子どもがいることである。嫌いな理由は、「自分の意見をいわなければならなかった」「興味がもてなかった」と記している。まさに、研究的授業であったからこそ、社会科が嫌いになったということであろう。

第二に、回答者の多くが—社会科が好きであろうなろうと—当該授業を思い出す授業と指摘していることである。峰①（前述7の選択肢中のソ、以下選択肢の記号のみ示す）のでは、14人中7人（1）が、峰②（ア）では9人中3人（1）が、伊澤（シ）では14人中9人（3）が、松本（サ）は4人中1人（1）、嶋本（セ）は4人中4人（2）が、関（タ）では7人中5人（4）が当該授業をあげている。カッコ内の数字は特に印象深いと回答した者の数。松本が一人しかいないが、同一単元である公害まで広げると、5人中5人（3）となる。峰②もやや低いだが、1年生の授業であることを考えると、やむをえない。峰②の体験者は表⑦にみられるように、イ（ポスト）、ウ（乗り物）をあげていることからことからも、峰の実践が大きな印象を与えていると推察できる。以上の結果は、表⑥の研究校の数値より高いものである。

第三に、その授業の特徴は、イ（調べたり、考える力を育てる）、オ（クラスの皆で考え合う）、キ（一人ひとりの考えを尊重）が共通して高い数値で指摘されている。同時に、それぞれの実践者にも若干の相違も見られることも興味深いことである。峰①・②では、ク（何でも自由に学習）が高く、伊澤ではエ（先生が中心になって）とクが高い。嶋本・関ではコ（実験・見学など活動的授業）があげられている。それぞれの授業と実践者を知っている筆者の目からみても、その特徴を押さえたものであると考える。

第四に、こうした思い出に残る授業から学んだことでは、前述表⑥の研究校のそれと大きな差はみられないが、松本・嶋本実践にかかわってキ（昔はどうだったか、時間の経過の中で考える）やサ（昔の人の努力）が、比較的多くの指摘があるのが目につく。それは、工業学習と伝統工業の学習であるから、どうしても歴史的に考えねばならないからである。しかし、同じ工業学習でも峰①では、キをあげた者は2人しかいない。松本の場合は、他の授業で指摘されたそうした面に峰実践と松本実践の相違がみられよう。

選択肢が必ずしも社会科の内容や当該授業の論点に即して構成されていないので、以上

のような選択になるのも当然である。全体に、回答者の授業を通して学んだ見方・考え方に力点が置かれ、社会科固有な見方・考え方となると物足りなさを思わざるえない。ウ・オ・カ・クは必ずしも社会科固有なものではない。むしろ、キ・コ・サ・シ・ス・セといった選択肢の方が社会的である。上記のキについて以外、目につくのは伊澤実践にかかわって、コ（世の中の人や物・組織・制度の関係）を選んだ者が8名いたことぐらいである。

それぞれの教師の教育内容観・教材観等については、この調査からは明らかにすることはできないし、またそれを目的としてこなかった。この問題については、別な機会に譲りたい。

10 現在の生活と小学校の教科等

小学校における教科の学習が、被教育者の現在の仕事や学習にどのように関係しているのだろうか。遠回しの質問であるが、次のように聞いてみた。

「あなたの今の学習や仕事をするうえで、とくに意味があると思われる小学校の教科や活動は何ですか。下からいくつでもよいですから選んでください。」

選択肢は、小学校の各教科、道徳、遠足・運動会などの行事、学級会である。

社会科好きの者が社会科をあげるのはいわば当然なので、ここでは国語が好きだった者（97名）と、算数が好きだった者（97名）について研究校・一般校別に示すことにする。なお、表では教科と道徳のみ表示することにする。

表⑧ 意味ある教科・活動（単位％）

校種	国語好き		算数好き	
	研究校	一般校	研究校	一般校
国語	72.2	58.2	41.2	46.3
社会	77.8	36.7	47.1	30.0
算数	27.8	34.2	58.8	53.8
理科	16.7	13.9	41.2	20.0
音楽	11.1	10.1	17.6	8.8
図工	33.3	8.9	29.4	11.3
体育	16.7	7.6	5.9	8.8
家庭	44.4	17.7	11.8	17.5
道徳	11.1	11.4	35.3	13.7

ここからわかるように、社会科が現在の仕事や学習にとって意味ある教科であると答えた者は、国語好きにおいても、算数好きにおいても、研究校の方が一般校より高い。特に、国語好きでは、一般校より2倍以上も高い。算数好きで数値が下がるのは、卒業後の年数を考えると、いわゆる文系・理系の現れであろう。一般校の特徴は、3R'Sにかかわる教科が高いのが特徴と見なすことができよう。

今まで述べてきた調査結果もそうであったが、この結果も社会科研究校の社会科の方が被教育者にとって有意義な働きをしているといえよう。ところが、興味深いことは当該授業のそれぞれについてみると、実践者によってばらつきが見られることである。峰①では、14人中8人(57%)、伊澤では14人中3人(21.4%)にしかすぎない。社会科に力を注いできたにもかかわらず、上記国語好きよりも低いし、また社会科好きが社会科と回答する数値(75.0%)よりも低い。考えられる理由は、同校の研究が社会科をベースにおきながらも、子どもの経験を全体的に発達させるために他教科・他領域への取り組みを重視していた。その結果、被教育者の意味づけが他教科・領域へ分散したためではないだろうか。

おわりに

以上、社会科を中心に学校ぐるみで研究を続けてきた学校の卒業生を追いかけ、一般校の卒業生と比較しながら、研究校における社会科授業のもつ意味を考察してきた。その結果を簡単にまとめると、以下のようになる。

第一に、研究校の方が一般校より社会科を好きになり、自己とのかかわりの深い学びを成立させてきたことである。第二に、そのような学びを成立させたのは、一人ひとりの子どもに自らの学習問題をもたせ、その問題をその子らしく追究することを保障していたことである。第三に、そうした学びが卒業後何年も経過しても、生きて働いていることが明らかになったと思う。しかし、その学びはかならずしも、社会科固有の学びではなく、教育全体にかかわる学びである。いわば、社会科から入って、社会科を越え、人間形成全体に広がっていつているのである。それが、第四にいえることである。

このように、調査結果を読んだとき、次の二つの課題が生じてくる。

第一は、社会科の教科性をいかにとらえるかということである。教科は人間形成の手段といっても、いかなる手段であるか、教科に即して解明する必要があると考える。社会科に入って、社会科からでていくとき、人間形成に社会科としての寄与があつてしかるべきであろう。そこが、研究校の実践でも、今日の社会科研究においてもかかえている問題であると考ええる。

第二に、それは同時に社会科カリキュラム構成の問題であるとも思う。当該授業は息の長い追究を保障した優れた授業であった。しかし、その当該授業で追究された問題が、教師・学年・単元を変えて新たな形で追究されているとは思えない。3年で問題にされたことが、その後の学年で新たによみがえり、子どもの論理を拡大・深化させるようにカリキュラムを構成する必要があるのではないだろうか。そこに、社会科の固有な側面と人間形成的側面を統一するカギがあるのではないだろうか。④

今回の調査は、こうした問題を浮き彫りにした。それについての考察は機会を改めて論じてみたい。

註

- ① 加藤章「社会科体験が意味するもの」(日本社会科教育学会『社会科教育研究』 No.54,

1986年)

- ② 村井淳志・守友 崇「安井俊夫にみる主権者を育てる社会科」(『教育』No.543, 1991年1月, 92年2月, 国土社)
- ③ 村井淳志「判断主体の形成と近現代史教育」(歴史教育者協議会編『新しい歴史教育, 6』, 1994年, 大月書店)
- ④ 実践は, 山田勉・井上晃治「日本の工業」(『小学校社会科の授業, No.2』, 1974年, 国土社)で取り上げられている。
- ⑤ 授業記録は, 「考える子ども」(社会科の初志をつらぬく会, No.107, 1986年5月号)に掲載, 原題は「一年生にとって社会科学習とは—単元 学校までのみち—」
- ⑥ 社会科の初志をつらぬく会「考える子ども」(No.83, 1972年5月号)
原題は「教育的系統の成立と発展—単元『日本の工業の展開の中で』—
- ⑦ 社会科の初志をつらぬく会「第27回夏季集会特集号」(1984年), 原題は「集束と拡散の中での個の発展—伝統工業『紙と私たちの生活』の展開の中で—」
- ⑧ この調査は平成元年度に科学研究費補助金(一般C)の交付を受けて実施したものである。研究代表市川博, その他影山清四郎・藤岡完治の共同で申請。(申請題目, 「ライフヒストリーにおける社会科学習経験の意義についての実証的研究」)本稿は, その調査データに基づいている。
- ⑨ 峰が在職していた鎌倉附属小学校では, 子どもの学年段階の発達と社会科指導内容の系列を統一するものとして, テーマに基づく内容構成が考えられていた。例えば, 5年は経営と立場という学年のテーマを設け, それに基づき農業・工業等の産業学習や国土学習を位置づけようとしていた。各学年間の発展がかならずしも明確ではないが, 個性的でありかつ共通性をもった実践を展開するうえでも, そこから出発できると考えている。